

Improvement Of Teaching Methods(14)

発問

校長

授業中に教員から生徒に対する問いかけが発問です。斎藤喜博は「発問は、授業展開の契機をつくるために、もっとも直接的なものである」と述べています。発問と質問は異なります。質問は、一問一答で単純に知っているか、否かで答えることのできるものです。それに対して発問は、答えが一つとは限らず、思考・認識過程を経て答えるものです。また、発問は学力を形成するものです。

発問は、生徒の多様な答えが返ってくるので、教員は教科内容に即して生徒の思考活動、探究活動を促し、生徒が主体的に教材に取り組むように意図して発しなくてはなりません。教員の発問に対する生徒の答えが、最終的には授業のねらいや課題解決につながるのです。

発問のポイント

1. 授業前に発問を十分に吟味し、どの場面で取り上げるのか考えます。
2. 授業のねらいを押さえさせるための主発問と、補助発問を上手く使い分けします。
3. 発問のねらいをはっきりさせます。
4. 発問は簡潔に分かりやすい言葉で問いかけます。
5. 生徒の既習事項、経験、知識、能力に配慮します。
6. 生徒の思考や探究を深めたり、発展させたり、疑念を呈して揺さぶったり、本音を引き出したりします。
7. いままでの発問との関連性を考えましょう。

注意点

1. 発問の良し悪しは、教員の教材解釈によることが大きいといわれます。教員が教材に対峙し、練った問いかけをすることです。
2. クイズではないので知識を一方向的に教える授業では発問は質問となってしまいます。
3. 生徒の発言・表情・動き等や、その根底にあるものを読み取らないと、形式的な発問になってしまうことがあります。
4. 教員が期待する正答ばかりを求めてはいけません。「分からない」、誤答が授業を活性化し、生徒の知識・技能の共有化を図る可能性があります。また、生徒の答えから学ぶときもあります。